

坂 静雄先生を偲んで

六 車 熙*

日本学士院会員・本会名誉会員・京都大学名誉教授 坂静雄先生には、92才の天寿を全うされ、昨年10月13日に永眠されました。まことに痛惜の念に耐えがたく、ありし日の先生を偲んでここに謹んで追悼の拙文を捧げる次第です。

坂静雄先生は、明治29年11月16日に東京都で誕生され、第一高等学校を経て東京帝国大学工学部建築学科、さらには同大学院に学ばれ、鉄筋コンクリート構造学を専攻されました。大正11年4月には京都大学助教授として創設間もない建築学教室に赴任され、昭和8年4月には教授に昇進、昭和34年11月の停年退官まで建築構造学講座を担当されました。京都大学に赴任以来実に37年余の永きにわたり教育・研究に全精力を傾注され、幾多の有能な人材を育てられるとともに、わが国は申すに及ばず世界のコンクリート系構造工学の先達として輝かしい研究業績を残されました。また、学内外においても数々の要職をつとめられ、教育行政、建築行政にも多大の貢献をされておられます。退官後も自らの研究に没頭される傍ら、学問成果の業界への還元を目指して日本建築総合試験所の設立に奔走され、昭和39年5月の創設とともに同所の所長、理事長などを歴任され、学の立場から業界の指導に尽力されました。

先生の学問的御業績は改めて申し上げる必要のないほど輝かしいものであります。なかでも特筆すべき御業績の一つは、鉄筋コンクリート構造の弾塑性力学および終局強度設計法の研究であります。先生が京都大学に赴任の翌年におこった関東大震災は、先生の学問的思想の構築に影響すること多大であったと推察されます。先生は、関東大震災の経験を踏まえて、地震国であるわが国の構造物は、弾塑性力学の立場よりも終局時の耐力および終局に至るまでの弾塑性変形状にもとづいて設計するのが妥当との思想を、余人に先駆けていち早く打ち出されました。以後の御研究には終始これが基本思想として流れ、単調および繰返し載荷のもとでのコンクリートの応力ひずみ関係、コンクリートと鉄筋の付着性状、破壊に至るまでの部材の変形、プラスチックヒンジの形成と曲率などの詳細な基礎研究成果は、不静定架構の弾塑性変形解析法へと発展し、終局強度設計法を提示されるに至りました。今日でこそ終局状態にもとづく構造物の設計は当然のことと受けとめられていますが、弾性設計が主流であった当時

においては、きわめてユニークな考え方として内外の注目を集め、また、今日の終局状態にもとづく構造物の耐震設計の考え方の基本となった偉大な御業績と言えましょう。

このように先生の御研究は、明析なる頭脳と将来を見通す優れた卓見から常に余人に先んじ、後進の進むべき道を自ら切り開いておられます。とりわけ、昭和6年から2年間にわたる欧米留学



* Hiroshi MUGURUMA :
本協会副会長、京都大学工学部建築学科教授

は、当時の先進諸国のコンクリート系構造工学の趨勢に接し、まことに有益であったと聞いております。その折の見聞の一端に曲面板構造の力学やクリープ理論、さらにはプレストレストコンクリート構造があり、これらに関するわが国での研究の口火を切られております。とくにプレストレストコンクリート構造については、筆者がお世話になった頃、これこそコンクリート系構造のあるべき姿の理想であると、本格的な研究の機が熟するのを待ちつづけたと述懐しておられました。プレストレストコンクリートに関する先生の本格的研究が始まったのは第二次大戦直後からであり、地震のないヨーロッパで生まれたプレストレストコンクリート構造を、地震国のわが国独自の考えに立脚する構造法、設計法に体系化されたことは、万人の知るところであります。単にわが国における本構造の生みの親、育ての親であるばかりでなく、諸外国における今日の発展の原動力ともなられました。

本協会は昭和 33 年 4 月に設立されましたが、発起人の一人としてその設立に尽力され、また、設立後の困難な時期に 2 期にわたり会長を務められるなど、本協会にとっても先生は生みの親、育ての親であります。日本代表学術団体として本協会がプレストレストコンクリート国際機構 (FIP) の一員に加盟し、内外の活動を通じて今日の隆盛を築くことができたのも、先生という先達あってのことと言えましょう。

このような先生の輝かしい御業績、御貢献にたいし、昭和 43 年 4 月には勲二等瑞宝章が授与され、また、昭和 46 年 12 月には日本学士院会員に推挙されました。推挙の伝達当日、お喜びとともに「学者冥利に尽きる。学は一生。」と漏らされたのが、今でも鮮烈に思い出されます。病に倒れられるまで、これが楽しみと言われて毎月の学士院例会には欠かさず出席されておられました。学を友とし、学を学び、学と語らう。先生のお宅にお邪魔するたび、世間話がいつか学問の話になり、後進に学の道を説かれる先生のひたむきなお姿が今でも忘れられません。まさにわが国ばかりでなく、世界の学術の発展に終生を捧げられたと申せましょう。

1993 年には日本で FIP シンポジウムが開催される予定です。日本にとっては初めての FIP の学術・技術国際集会であり、本協会では内外の期待に応えるべく準備を進めております。生前、先生は日本での開催をぜひ実現したいと言われていましたが、その開催を見ることなく逝去され、無念やるかたない気持です。日頃、先生から受けた御薫陶を帯し、来るべきシンポジウムを盛り上げるべくひたすらな努力をお誓い申し上げ、本協会を代表してここに謹んで先生の御霊の安らげんことをお祈り申し上げます次第です。